

これまでの指摘事項について

平成 23 年度第 1 回汽水湖汚濁メカニズム解明調査ワーキンググループの指摘事項

○ 斐伊川連続調査結果について

指摘事項	対応
TNについて、同じ流量でも夏季の負荷量は低く冬季は高いことになる。このような場合、1本のL-Q式では不十分だと思う。(石飛委員)	資料3-1のとおり。
TOCについて、実測値とL-Q式の値が随分違うので、1本の式でよいのか検討が必要と思う。(清家委員)	
NとPの流入負荷量が増えている原因等について確認したい。(吉田委員)	

平成 23 年度第 2 回汽水湖汚濁メカニズム解明調査ワーキンググループの指摘事項

○ プランクトン調査結果について

指摘事項	対応
宍道湖湖心のクロロフィルの経月グラフ(別添資料図28)と、PP細胞数の経月グラフ(図29)において、データが記載されていない部分がある。(山室委員)	(国交省)

○ 流入負荷量の把握の精度向上について

指摘事項	対応
L-Q式について、流量によって粒子態か溶存態かの分け方がうまくできるのか検討が必要と思う。(中田委員)	資料3-1のとおり。
モデルにおいて、各態の割合(洪水時など)について、どう設定するのか検討が必要と思う。(中田委員)	
洪水がある場合に負荷量をどう見積もるか検討が必要と思う。(山室委員)	

平成 24 年度第 1 回汽水湖汚濁メカニズム解明調査ワーキンググループの指摘事項

指摘事項	対応
プランクトン 今後の解析にあたり、同時間断面だけで相関をとるだけでなく、少し時間がずれている場合の相関をとるような、想定したメカニズムに沿った解析も一緒にできればよい。(山室委員)	今後の調査の参考にする。
難分解性 分解実験のときに使ったときのプランクトンの種構成はどうか。(中村委員)	資料 3-2 のとおり。
難分解性 データも出来るだけ活かせるように、蒸発影響について、再整理できればよい。(中村委員)	資料 3-2 のとおり。
難分解性 分解速度が算出できると思う。(中田委員)	分解速度は算出できる。なお、経時に変化するので、どの速度をシミュレーションに用いるか要検討。
難分解性 由来について、文献サーチをすること。(山室委員)	今後、確認する予定。
難分解性・モデル 例えば植物プランクトンの動態をシミュレーションするとき、細胞内分泌の形で溶存態の有機物を出すというような計算だが、今後は易分解と難分解を割合などで計算しないと難しいと思う。(中田委員)	易分解と難分解などに分けて計算できるように、検討する。
モデル 難分解も易分解を分けて計算する必要がある。(中田委員) 流入河川についても難分解と易分解を分け、流量に応じて計算する必要がある。(山室委員)	同上
難分解性 斐伊川の窒素と磷は、比較的 DON、DOP の割合は少ない。一方、COD は溶存態が多く、ほとんどが難分解性。そうすると、斐伊川から入ってくる難分解性の C と N と P の比率は、宍道湖内の DOC、DON、DOP の比率と大分違うと思うが、どうか。(中田委員)	今後、解析する予定。
誤記 43 ページ③プランクトンの欄において、2 項目目が「植物プランクトン」となっているが「動物プランクトン」である。	修正した(資料 4)。